

特 116

453

增補  
訂正  
再版

日蓮宗

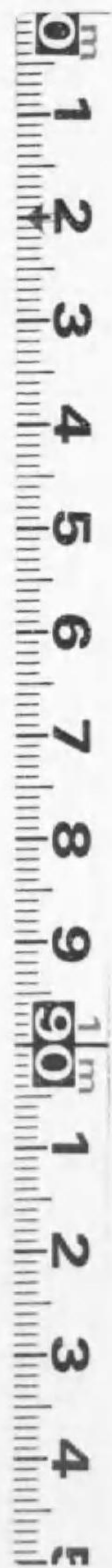
立正大師布教宣傳



日敬流

琵琶彈奏

山下日敬作



始



持116  
453

目次

一、開目鈔(一節).....一

二、四條金香殿御返事(抄).....二

三、波木井殿御書(抄).....三

四、如説修行鈔(一節).....四

五、法の光.....五

六、開宜.....七

七、再版、の挨拶.....八

八、提要.....一

九、跋.....五

十、佐渡日朗坂(其の一例).....六

十一、新撰六老九老中老諸僧會箋.....七

附録

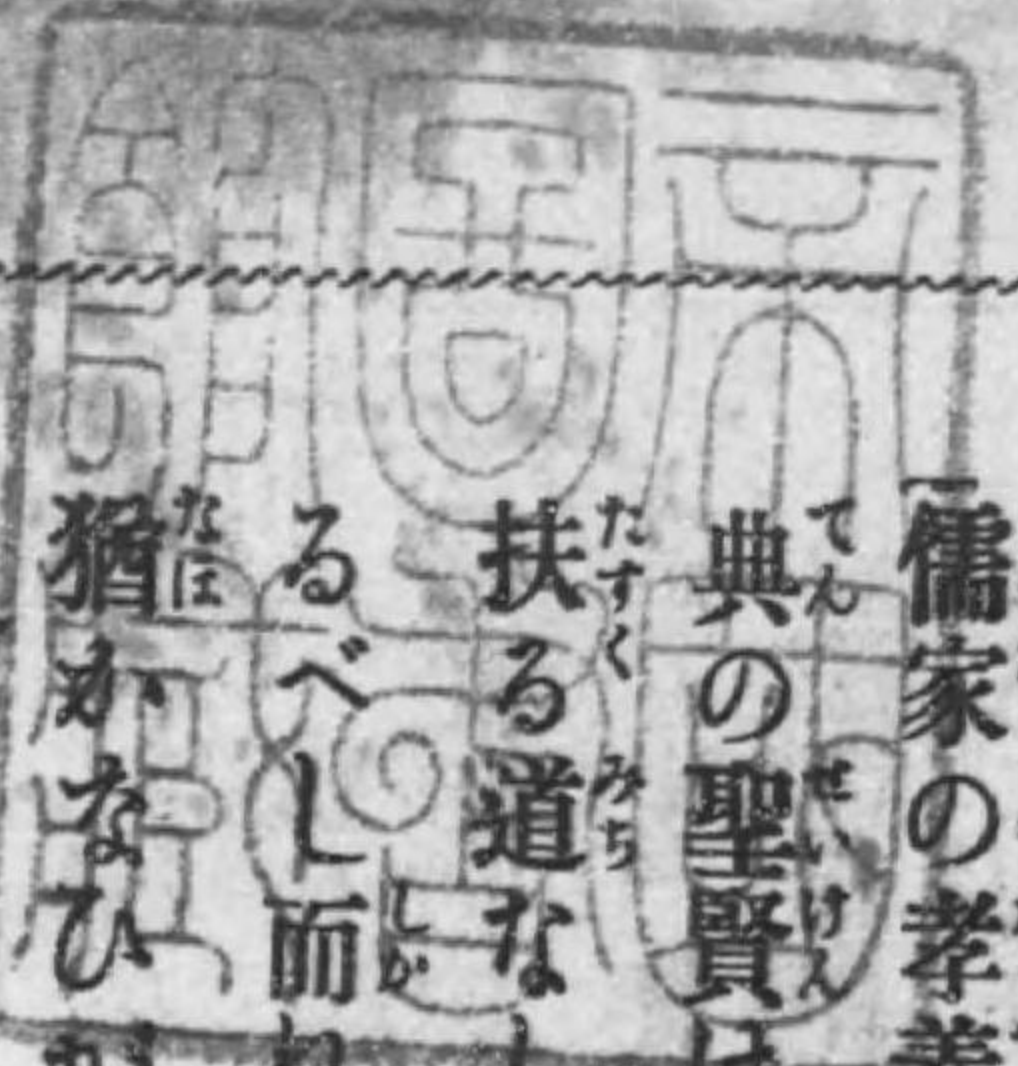
開目鈔

著者 三増本

儒家の孝養は今生にかぎる。未來の父母を扶けざれば外典の聖賢は有名無實なり。外道は過未を知れども父母を扶る道なし。佛道こそ父母の後世を扶れば聖賢の名はあるべし而れども法華已前等の大小乗の經宗は自身の得道猶かなひがたし。いかにいはんや父母をや但文のみありて義なし。今法華經の時こそ女人成佛の時悲母の成佛あらはれ達多惡人成佛の時こそ慈父の成佛顯るれ。此經は内典の孝經なり。(其ノ一節)

大正  
14. 1. 19  
寄贈

持116  
453



儒家の孝養は今生にかぎる。未來の父母を扶けざれば外典の聖賢は有名無實なり。外道は過未を知れども父母を扶る道なし。佛道こそ父母の後世を扶れば聖賢の名はあるべし而れども法華已前等の大小乗の經宗は自身の得道猶かなひかたし。いかにいはんや父母をや但文のみありて義なし。今法華經の時こそ女人成佛の時悲母の成佛あらはれ達多惡人成佛の時こそ慈父の成佛顯るれ。此經は内典の孝經なり。(其ノ一節)

開目鈔

寄贈本

大正  
14. 1. 19  
寄贈

目次

一、開目鈔(一節).....	一
二、四條金吾殿御返事(抄).....	二
三、波木井殿御書(抄).....	三
四、如親修行鈔(一節).....	四
五、法の光.....	五
六、開宣.....	七
七、再版の挨拶.....	八
八、提要.....	一
九、跋.....	五
十、佐藤日附坂(其の一節).....	六
十一、新編六老九老中老諸僧會箋.....	七

附録

四條金吾殿御返事

一切衆生南無妙法蓮華經と唱るよりほかの遊樂なきなり。經に曰く衆生所遊樂云々此文あに自受法樂にあらずや。衆生のうちに貴殿もれ給ふべきや。所は一閻浮提なり。日本國は閻浮提の内なり。遊樂とは我等が色心依正にも一念三千自受用身の佛にあらずや。法華經をたもち奉るよりほかに遊樂はなし現世安穩後生善處とは是なり。たゞ世間の留難來るごもごりあへ給ふべからず。賢人聖人も此事はのがれず。たゞ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經ごこなへ給へ。苦をば苦ごさごり樂をば樂とひらき苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經とうちとなへるさせ給へ。これあに自受法樂にあらずや。いよいよ強盛の信力をいたし給へ。

(抄録)

波木井殿御書

日蓮は日本第一の法華經の行者也。日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても日本第一の法華經の行者日蓮坊が弟子檀那也と名乗て通り給ふべし。此法華經は三途河にては船となり死出の山にては大白牛車冥途にては燈となり靈山へ參る橋なり。靈山へましまして良の廓にて尋させ給へ。必ず待奉るべく候。但し各の信心に依べく候。信心だに弱くばいかに日蓮が弟子檀那と名乗せ給ふともよも御用ひは候はじ。心に二ましまして信心弱く候はゞ峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落つると思召せ。大阿鼻地獄疑あるべからず。其時日蓮ばせ恨みさせ給な返々も各の信心に依るべく候也。

抄録

如說修發行鈔

天下萬民諸乘一佛乘と成つて妙法獨り繁昌せん時萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず雨壞を碎かず、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顯はれん時を御覽ぜよ、現世安穩の證文疑ひあるべからざる者也。(其ノ一節)

法の光

實に蒼海の岸、天日煌々と輝き、青蓮華咲き渡る寂光淨土の地、安房の國小湊に本師の命を受け、出現あらせ給ふ我宗祖日蓮大上人は法道あやまてる衆生を、あはれみ給ひ、身名を抛ち給ひ、法の爲、國の爲、乃至一切衆生の爲につくさんと、奮然として決意を立て給ひ、妙法を開宣なし三類の強敵とたゝかひ、先には刀杖、後には流罪、法難數多、其の艱苦筆に染め難く、言につくし難し矣。實に凡體の及ぶ處にあらず焉。されば妙法の信念は不惜身命の妙諦なり。かるがゆるに、立正安國論を時の將軍に建白なし、無明の暗を照し盲目に伴しき彼等法敵を切靡き、廣宣流布なし給ふ。其の大功德の現はれ給ひ大正十一年、畏くも一天萬乗の君様より

立正大師

の宣下をたまはりし事

宗旨の下に居て、感涙に咽びてやまず。

一天四海に妙法は益輝き渡る

大日本帝國萬々歳

大正十二年八月四日

我等

山下日敬

開宣

尊き御國に出現あらせ給ひし祖師日蓮大聖人は、衆愚の骨肉を削り、熱鐵の墮地獄に阿鼻叫喚の若を救ひ給はんとの廣大無邊の大慈大悲より、妙法の網を下し給へば、我等その網の中に生れ、成佛得脱の法徳に浴すこと實に千萬無量、只感涙に咽ぶのみなり。

茲に我等大聖人至善結晶の生涯の事を感佩し、御師一代の苦しみに比しては末世の我等凡俗九牛の一毛、渺海の一粟、誠に云ふに足らぬものなれど、微志僅に布教宣傳を思ひ立ち、立正大師布教宣傳を開宣し、萬分一なりとも法恩を報せんとして、江湖大方の士に問ふこととなりたれど、我等智力資力至りて微弱、不練且つ未熟此の任にあらねども、要は始隗の一端ともならんとなり。

江湖大方の博雅、幸に熱誠なる信を寄せ給ひ短を捨て小長を拾ひ、此の立正大師布教宣傳に一臂を加へ給はるやう  
御同情を乞ふものなり

立正大師布教宣傳協會

月 日

再版に就いて

御挨拶

昨年八月十八日初版を發行致し幸にも江湖皆衆方の多大の御賛助を乞ひ得まして、いよ／＼布教宣傳器彈奏の第一歩に運び寄りました處、アノ大地雲に際會致しました。

爲に往再今日に及びましたが何分堅い決心の下に發起しました企て故接土重來の勢を以て再版致しました次第です。

それを更に江湖に糺しましたが、意外に多くの御期待が有りました事を感佩仕ります。

茲に更に錯案を改め

「御遺文」中の肝腎を、苦心修磨を以て編みました「六老九老中老諸僧會集」を附録として添へますここに致しました故何卒御精讀を願ひます。

並に不日發行致します二十八曲に就いても最非御精讀を今より懇願致しおきます

大正十三年十二月一日

日 敬

日蓮聖人御一代記

全二十八冊

提要

其一 白蓮華

(御誕生と登山)

貞應元年壬午二月十六日の午の刻、安房國小湊に於いて、貫名次郎重忠一子を擧ぐ、海上に白蓮華の瑞あり矣。

此の寧馨兒善日磨こそ、後年の日蓮大聖人なりけれ。年齒弱く、千光山清澄寺に登り、得度して圭角を磨すの件を説く。

其二 大寶珠

(虚空藏菩薩祈願)

善日磨僧形と成り、名を蓮長と稱す。多年螢雪の勞あり學大に進む、しかも胸中尙且つ一塊の大疑團あり矣、師に問へども、黙して答へず、同輩に問へども、更に黙して答へず、清澄一山啓蒙の知音無く、今は只山頂一字の祠、虚空藏菩薩に問はんと、蓮長こゝに參籠すること三七日、一心且つ不亂なり矣。いよ／＼満願の日、夢に一老僧の來つて手づから大寶珠を授くるあり。更に大藏に入りて刻

苦精勵、世尊の語、四十餘年未顯眞實を得たり。此の時の一沙門、他日妙宗の大法門を天下に叫ぶ妙機此處に緒を發す。蓮長の大勸行を説く。

其三 味 醜 翻

(諸國修行)

妙機茲に烈時に仁治元年、蓮長年十九飄々乎として山を下り、孤杖双鞋國を出て諸國に學ぶ。鎌倉に、又或る時は叡山に、寛元の頃は三井寺に、更に京師に、其の八宗兼學南都北嶺行く所として可ならざるなく、高野山にさへ登る。造詣深きこと佛より儒に及び、精力絶倫、十三經諸子百家の書に渡り、餘技又頗る長ず。遂に一天四海皆歸妙法の願業を發し、伊勢太廟に奏上し、小湊に父母を歸省するの件を説く。

其四 照 十 方

(旭ノ森 妙宗開宣)

天縱の才を抱いて蓮長年三十二、時は建長五年、十年の螢雪功ありて茲に妙宗開宣の企てあり。既に途上駿州にて八面玲瓏の玉芙蓉を天際に仰いで、默契あり、今又、家に歸り山に登り、山の一角、旭の森に立つて威容を正し、妙經を讀誦する時、朝暾嚇々、忽然として光明、十方を照らす、南無妙法蓮華經の七字、中央に現ずるを見る。時に四月二十有八日、此の破天荒の開宣式を説く件。

其五 打 毒 鼓

(清澄山法難)

建長五、四月八、清澄山に說法會あり、新來の氣鋭舊知蓮長、法壇に立つと聞え、來集の僧俗、筵に列して説を聞く。蓮長は説く曰く、世尊一代の説八萬四千、爾前の諸經は誰、正像二千年に弘通すべき權教のみ、方便のみ、法華經こそ、げに末法萬年流布の正法なりけれ。と釋尊業にのたまはしけるよ。雄辯滔々法華の醍醐味を説く。所は眞言の寺なり、衆大に激す中に地頭東條景信殊に憤怒す。蓮長もとより毒鼓を打して法の爲に叫ぶ。何ぞ一の東條を恐れん。されど知音に勧められて西條村華房の蓮華寺に逃るの件を説く。

其六 獅 子 吼

(鎌倉入りと辻說法)

蓮長一度び妙宗を開宣し、更に鎌倉に入らんとして、其父、妙日を、其母、妙蓮を稱へんことを言ふ。實に美なる法號なるを！ 大孝至醇の蓮長自ら改めて、始めて日蓮と稱す。後年の立正大師これなり。(以下聖人を以て稱ふ。)

建長五年五月中旬、聖人懇に父母に暇を乞ひ三浦に渡り、遂に鎌倉に入り、松葉ヶ谷に草庵を結び本化妙宗の大道場と爲す。萱の屋根月を漏し常住の燈なり、竹の扉霧を入れ不斷の香なり。當流伽



藍を立て、臭骨を羅すの徒の比に非ず。聖人日々、辻に立つて、瓦礫の屑を浴びつゝも、念佛無間、  
禪天魔、眞言亡國、律國賊と大獅子吼をなせば、威化及ぶ所、頗る多きの件を説く。

其七 靈泉涌

(船中間答)

下總葛飾の豪族富木播磨守胤繼、聖人に俗縁あり。つとに聖人の棟梁凌霄の良材たるを知り、累年  
補助あり「聖人に言あり。富木殿こそ妙宗開立の柱石なれ——」と、聖人寸暇を得て胤繼を訪ふ。多年  
の恩義を謝し、存念をも告げんと也。

富木氏船を出して鎌倉に入らんとし、共に乗じて船中、法華と眞言の差異を七段に分つて論下し、  
遂に富木氏をして信服せしむるの問答及び、船の金澤に入りて上陸し、地に靈泉涌くの件を説く。

其八 天武神

(日荷上人と仁王尊)

こゝに云ふ天武神とは佛法守護の力士仁王尊のことなり。男體の金剛神、女體の密迹神、凡て伽藍  
の山門に立つ。

日荷上人は俗姓六浦六郎、後年身延仁王門の二神を納めし人也。其の苦心譚を傳説に由り、滑稽且  
つ諸誰に説くの件。

其九 排妖孽

(安國論を作る)

白法こゝに隠没して、妙法流布の道を塞ぎ、國に奸賊の惡徒あり、妙法行はれざるを怒り、天爲に  
屋宿を襲じて人を論す。人は時に愚にして之れを曉らず、天災地妖七難、交々起る。聖人筆を呵して  
安國論を草し、宿屋光則を介して、執權時頼に示し、法華の正法に歸し他の權教を捨んことを諫む。  
後世儒夫をして立たしむ侃々諤々の妙論。此の一齣を祖述す。故に曲に名くるに排妖孽を以てす。  
而して次の佳境に及ぶ。

其十 白影動

(松葉ヶ谷焼打ち)

執權時頼の耳に逆ひ、激怒を招きし忠言と直言——執權以下長時其の他の忿怒は移りて以て、同氣  
の面々、文應元年八月念八、法敵となりて無慚にも聖人が道場、松葉ヶ谷の草庵を襲ひて炬火を投ず  
爲に草庵灰燼となり、聖人のがれて、附近の岩窟に入る。法弟子進士太郎其の他能く戦ふ。  
これより先き聖人、帝釋天に法樂せんとして鼓を打ち、經を讀む、竹椽に白きもの、影、動く、即  
ち白猿なり。聖人の法衣の袖を引いて山に入ること七八町。爲に聖人焼打ちの難よりのがる。  
其の件を嘸述せんとするなり。

其十一 浮木馨

(伊東流難)

聖人年既に四十、時維弘長元年、五月鎌倉に廣長舌を振ひ、更に衆愚の怨恨をかひ、流されて伊豆に送らる。邪法を説き、惑世欺人の罪ありと云ふにあり。歸依の武士、弟子等名残を惜む。高足日郎法師又不惜身命の従はんことを望む、許されず、見送る法弟、見返る師の坊、胸には藏す千萬無量、船は千里を走つて伊東に近づく。官人、聖人を欺いて粗板岩に乗せて鎌倉にかへる。川奈の漁夫彌三郎聖人を助けて避難の件を説く。

其十二 披榛莽

(川奈の靈顯)

漁夫彌三郎聖人を助け歸宅す。女房みね女又信仰厚く、無頼の徒來つて、彌三郎を脅威し、聖人靈顯を示す、諸諍かつ悲痛の場面。並に聖人、伊東八郎左衛門朝高の病苦を解脱せしむの件、今の海光山佛現寺の來由を説く。

其十三 神通力

(御母蘇生)

伊東朝高は聖人の鴻恩を謝す。聖人の謫處を問ふものに弟子日興あり。布施物を捧げて來り問ふものに江川吉久あり。而して弘長三年五月二十二日に至り始めて鎌倉より、聖人赦免の狀來る。聖人一旦鎌倉にかへり、後、慈母を問はんご故郷小湊に至る。慈母既にこごされ人々騒ぐ所、聖人丹精を抽んで、招魂の法を修し、而して經を誦し、病川消滅、不老不死——と呵せば、母さみ蘇生し、見るもの聞くもの尊信の心を起す。等の件を説く。

其十四 紫電閃

(小松原法難)

天津の地頭工藤吉隆聖人を尊信すること厚し。而して常に存問を怠らず。十一月十一日吉隆に招かれ聖人至らんとして蓮華寺を出、小松原を過る時、舊知東條左衛門景信、猛進し來り、聖人に向ひ雜言し、紫電一閃、聖人の額を傷つく。吉隆、聞きて又、馳せ參じ力戦して倒る。鏡忍坊其の他弟子皆能く防ぐ。法敵景信翌日熱を發し病みて狂死す。等の事を説く。俚人また聖人の像をいたみ、綿帽子を奉る。今に至りて猶聖人の像に綿を着せまつるは茲に基く。

其十五 澍雨至

(田邊の池雨乞)

文永七年春より夏に至る頃、天變あり、地震あり、疫癘、大旱ことく至り、人馬爲に路傍に死す。或は彗星東方に顯はれ、光芒七十餘度に及ぶ。加之、旱魃百日を算す。執權時宗、深く憂慮し極

樂寺の良觀を召し、雨乞ひの事を命ず。良觀命に應じ、修法につとむると云ふと雖も、一滴の雨も降らず、聖人代つて末法應時の經力を示さん——と叫び、七里ヶ濱に近き田邊ヶ池に出て雨をいのる。繼靡無き一色の碧天、焼くが如き赤日の下、僅に讀經二卷になん／＼として、忽然と黒雲起り、風雨迅雷降り續き、萬石の湖雨、甘露の如く三日三夜——八大龍王の擁護、法華經の功德並び至るの件を説く。

其十六 國家柱

(龍之口法難)

田邊ヶ池の雨乞ひ以來、敗れし良觀以下、壽福寺多寶寺其他の僧侶數千人、讒を構へて聖人を毒す時宗命じて聖人を切らしめんを爲す。遂に文永八年九月松葉ヶ谷の草庵より刑場片瀬に引かれんとす時、聖人鶴ヶ岡八幡宮社前にて、八幡大菩薩の不信を鳴し、龍の口に至る。四條賴基以下殉はんとす、太刀取り依智直重、聖人に改宗をす、むれど、聖人さかず、身自ら日本の柱たるものとなし、自若として動せず、刀双頭に加はらんとして段々壞——時に時宗の使ひ赦狀をもたらし來るの件を説く。はからずも一命を助かりし聖人は、更に預けられて愛甲郡依智郷に入る。時に九月十三夜。

其十七 瀨氣清

(星下りの梅)

聖人庭に立ちて、今の月天子は、かつては法華經の座に列りし名月天子にあらずや、嬉しがほに澄むは何事ぞ——と叫ぶ時、忽爾として雲漢の大星、降り來つて梅樹にかゝり、燦として大光明を放つ。時に鎌倉より使至り、聖人の死罪を免され、佐渡へ流すの命なりと傳ふ。依智妙傳寺の來由等を説く。

其十八 風伯激

(佐渡の波題目)

聖人つひに十月十日、依智を發して佐渡に送らる。一帆直に海に進みしが、風位變じて、船難に苦しむ。風伯激し、狂瀾また怒濤、舵を打つ。聖人立つて、龍神に祈れば、波浪鎮靜に歸し、海面に南無妙法蓮華經の七字を書すれば、其の跡歴然と波上に残り暫時は消えず、白鷗靜に飛ぶ。後人佐渡の波題目と稱して尊信するの事蹟を説く。

其十九 他山石

(塚原三昧堂)

十一月一日、本間重連聖人を大野郷塚原といへる地に送る。僅に小丘上の小堂、島中の人は皆仇敵堂外の地は盡く敵地、衣食ともに求むるの道なし矣。聖人雪を拂つて、壇を設け釋尊の立像を安置し一心に經を念じ、題目を唱ふ。

佛滅後二千二百年、法華經の爲に、かくまで苦しむことの嬉しきよ！と許り聖人身飢ゆるも、正

氣飢えず、玉を磨くは他山の石なり、人を善くするものは、他宗の敵なりと親じ給ふ。入道爲盛既に念佛を捨て、聖人に歸依し妻を千日尼と呼び、夫を阿佛坊日得と稱すに至る。等の件を説く。

其二十 恭 敬 心 (日郎坂)

弟子日郎は囚はれて、長谷の土牢にあり、預りの役人宿屋光則の息女罹病の事あり、日郎光則に乞はれて貼御符を試みて利驗あり、光則俄に日郎を尊信す。日郎乞ふて五十日の暇を得、佐渡に師の安否を尋ぬ。

執権時宗夢に赤衣の童子を見、迷霧一掃、聖人を救すの状を發す。日郎之を携え帯びて、海陸十餘日、再び佐渡に到る。其ありける燕の太子、丹の話、並に増基法師の頭も白き山鳥の挿話など——を説く。

其廿一 振 衣 出 (鎌倉へ歸り國諫の事)

文永十一年、三月聖人佐渡より鎌倉に歸る。聖人時宗に招かれて其の弟に趣く。禮意懇懇幾日の比にあらざれど、時宗遂に聖人の諫を容れず。聖人黒白を辨じ、衣を振つて出で小町の草庵にかへる。等の件を説きせんとするなり。

其廿二 飛 寶 錫 (甲州入 巡廻)

文永十一年五月十二日、聖人鎌倉小町の庵室を發し、甲州に向ふ。從ふ者日興、日向、日頂、日持以下七人、聖人箱根を越え駿州を富士川に沿ふて上り、甲州に入る。齋部六郎實長を人呼んで波木井殿と云ふ。實長聖人の徳を慕ひ、待つこと甚だ厚く、永遠精舎を建つべきの地をもとむ。——などの件を説く。

其廿三 解 鳩 毒 (善知法師法力あらそひ)

聖人甲州石和に至り、鶉飼の業障を撤し、菩提にみちびく。今の鶉飼山遠妙寺これなり。而して妙宗の信徒、日を追ふて甲州一圓に滿つ。

小室の法印、聖人と法論を戦はせ、法力を較ぶるも敵せず、聖人おのづからよこしまにふる雨はあらじ風こそ夜の窓をうつらめと示して法印を諭す。其の件を説く。

其廿四 寂 光 土 (聖人身延山入)

現世活潑の中にも塵寰を絶せし、寂光土はありけるよ。老樹天を蔽ひ、白雲谷に横る、身延の山こ

十二  
を實に幽閑の清地なれ。聖人、天竺の盤峰、漢土の天臺に比し、偏に此の地に閑居して、永く一世を  
鍊度すべしとなし、眼を聖經妙典の上に光らす。聖人又至孝、壽五十三の高きに及ぶも、父母を景敬  
すること善日磨の昔の如く、高きに登つて、供養を捧ぐ。

聖人又勤王の志あり矣。方外の身を以て猶且つ天下の憂を抱く事最も深し。世人を戒飾して「日本  
本の武士の中に、源平二家と申して、王の門守の犬二匹候」と記し、大義を説き、名分を論ず。其の  
志のある所察す可し。百世の下、風を聞いて、感を發し、奮て起つもの多々あり。以上を説く。

其廿五 三 寶 鳥

(七面大明神本化現)

身延山の西、更に山背く、八功德水を澄すの池、五色の雲霧涌き、三寶鳥かけり鳴くの所、七面山  
あり矣。聖人説法の折、來り參じて法を聞く艶麗端正、妙齡の女あり。婦人時に才餘の蛇となり。更  
に形を復せば本地吉祥天女なり。佛教を蒙り、護法神となりて此の山を守り、水火兵革の難あること  
なからしむ——となり。並に後世の武將身延攻めの件等を説く。

其廿六 鳳 翔 場

(經一磨と日郎上人)

香煙飛んで上方の雲、法水散じて下界の雨、實にや久遠本佛の熱地、一乘妙典の源泉たる身延の山

の鳳翔場、賽者益々多きなり。聖人茲にある九年、志成らずんば出でじと思ひしなれど、諸宗の權教  
未だ禁せられず、本門の戒壇未だたらず、終に此の山を下らんとす。聖人常に鬼神を願使する意氣こ  
そあれ、今は多年の艱苦と云ひ健康往年の如からず、常に藥餌に親む。病床にあるの日、經一磨と云  
へる七歳の男あり、下總竹内氏の子なり。聖人、此の少年の頭を撫して、日郎を師として、修行をつ  
み、成長の上、京都に上り、本化の妙法を天聽に達し奉れ——と後事を附度するの件を説く。

其廿七 合 符 節

(蒙古襲來)

文永の敗衄に懲りもせず弘安の夏、蒙古の賊來り攻む。閏七月、颶風至り、敵死するもの十餘萬人  
伏屍海を蔽ひ、歩いて渡るを得。國家われを信せずと雖も、われは國家を救はざるべからずと、聖人  
憂慮おかず、身延山巔に上り、西海に向ひ、敵國降伏の祈禱をなす。以上を説く。

其廿八 修 至 善

(聖人池上御入滅)

末世末代教主の世尊も、涅槃の旋をまぬかれ給はず、實に法華經の大方行者も、其の生涯の至善を修  
了して、武州池上右衛門大夫宗仲の館(今の本門寺)に入滅し給ふ。壽六十一。聖人の抱負、目的皆  
遠大、永く衆生を感化して護國鎮護の柱となりけるを！

加ふるに衣鉢を受け、後事を附托されし門下の俊才縮素道俗又活躍果進、永く世道人心を裨益せし  
事多々なりけるを。以上を説く。

十四

大正拾壹年貳月拾六日——發案  
大正拾貳年七月 下院——編述

山下 日敬 編述  
藤原 牛麿 校訂

御一代記提要

跋

炎帝猛威を振ひ、暑熱避け難し。滅却すべきの心頭は空疎、無殺すべきの熱闘業は貧弱  
實に三界は火宅なるかな。山下日敬氏 予に示すに、稿本立正大師布教宣傳を以てす。其  
の尊信師依の佛法の爲、乃至宗祖立正大師の爲奮つて布教宣傳の任に當り後宇生を此の  
事に捧げ、つくさんとをり。予問ふて曰く、日敬流なるもの君以前にありや。君答へて  
曰く、無し矣と。然れば君は日敬流の鼻祖なるなりと。君呵々と笑ふ。其の意氣正に世  
とすべし。世尊雪山の苦、立正大師六十一年の勸行、幸に取つて以て範とし、當初發願  
の志を變ゆること勿れと。其内容を聞くに、在來の琵琶歌を最も鮮新に彈奏しつゝ要所  
要所に挿話を容れ、ウタと地と言と錯雜して頗る妙あり矣。予は云ふ君、布教説法に長  
ずるの他、別に藝苑の士なるにあらず耶と。君更に呵々と笑ふ。立正大師一代の記の眞  
象にまじ、俳諧あり、悲歌あり、かへつて婦女童幼も喜んで聞くべし。試みに一奏せよ  
と。君更はく笑つて絃を弾く、絃音未だ高からずと云ふと雖も其の志低きに非ざれば  
涼風幸に四邊に來る。君よ、早くこれを江湖に問ふて、聞々觸るゝ所、聲々玄に入るの  
妙諦に至れよ、と。書後忠言を呈すものは、置張亭下

大正十二、中伏

藤原 牛麿

其の一例

(琵琶歌) 下かくと聞くより日郎は、中千天に拜し地に拜し上天にも登る心地して、さてもうれしや師の御坊、流罪赦免とあるからは申すぐさま佐渡へ渡海して中ウケ御師のよろこび見んものと、牢舎の疲れことゝもせず下首に赦状をかけられつ變心も空に鎌倉を大干出で行く先は寒山の、浪風荒き佐渡ヶ島中雨の且も風の夜も、御師を思ふ真心の中ノウケ 只一筋に馳せ向ひ下やうやくたどる北海の止小木の濱邊につきにける

(言) こゝより一の谷までは、なほ三里ばかり日郎上人は海陸十餘日の旅、今は身體も疲れ脚も痛み歩行自由ならず、常の旅なれば、一夜を宿るなれど、日頃師を思ふ心の深き日郎、一時も早く知らせたてまつらん。と。

(ウタ) 音我れとわが心をはげましつゝ、下有り合ふ樹枝を杖となし申一の谷にと進み行く、長き旅路につかれはて、急ぐ心のはかどらず 中受さすがに永き春の日も下いつしか暮れて夕まぐれ、たどりて漸らに、後山にとさしかゝる止

(言) 日郎上人今は身體もつかれはて、目くらみ、息も絶えなんばかり、我れ知らず路傍の石にたほれ伏す、暫し正體なく、キゝありて心づき我れもしこゝに倒れ、赦免状のあやまつて法敵の手に渡りなば御師の不幸いかにばかりぞ、ア、今は死なんにも死にがたし………

〔御一代記〕第廿、恭敬心佐渡日郎坂抄録

附録

新撰 六老九老中老諸僧會箋

藤原牛麿 補  
山下日教 編

六老僧

第一 日昭聖人

承久三年生る。上總の人平賀祐昭の子也。始め成辨、建長六年祖師に就き、本門の大戒を授けらる。弘安七年鎌倉に、經王山妙法華寺〔第十六代日亮、元和年間、今の豆州玉澤に移す。〕を創めて居し、元亨三年三月廿六日寂、年百三。〔身延清規〕「本門圓頓戒血脈譜」の著有り。

第二 日朗菩薩

下總の人、平賀有國の子也。幼名吉祥丸、日昭

第三 日興聖人

は其の叔父也。年十歳、建長六年秋、祖師に就く。大國阿闍梨と稱す。鎌倉比企ヶ谷妙本寺、池上長榮山本門寺〔東海道線大森驛より西南二十丁餘〕及び、下總平賀長谷山本土寺〔建治三年創む。〕を兼帶、元應二年正月廿一日寂、年七十八。別項〔恭敬心〕参照。

甲斐の人、大井光重の子也。寛元三年五月八日生る。始め伯耆坊、字白蓮、正元々々年祖師に就く。

「御義口傳」二卷を著す。正應二年、駿州富士大石寺を創む。又永仁六年重須に本門寺を創む。元弘三年(又、正慶二年)二月七日寂、年八十八。(又八十七)

第四 日向聖人

房州の人、小林重信の子也。建長五年生る。始藤十郎、民部阿闍梨。佐渡公と號す。文永元年(又、二年)祖師に就く。年十一。後、身延及び上總藥原常在山妙光寺(弘安六年創む)を兼帶す。正和三年九月三日寂、年六十二。「日向記」一卷の著あり。

第五 日頂聖人

建長四年に生る。駿河の人(又下總)父は伊豫

守定時也。當木胤繼の義子也。伊豫阿闍梨と號す。文永四年祖師に就く。年十六。建長五年真間弘法寺(千葉縣市川町)を改めて日宗となす。寺は舊、空海の遺跡にして真言宗なりき。後、正林寺を創む。文保元年三月八日寂、年六十六。

第六 日持聖人

建長二年、駿河に生る。松野政行の義子也。始め能登坊真乘。文永七年、祖師に就く。時に年廿一(又弘長三年とも)蓮華阿闍梨と號す。後、駿州庵原郡松野に、貞松山蓮永寺を創む。永仁三年元旦、海外に趣き、終焉の地を知らず。「持法華問答鈔」の著あり。

○九 老僧 (朗門九風)

第一 日輪聖人

文永九年生る。下總の人、平賀忠晴の第二子也。大經阿闍梨と號す。池上本門寺三世となる。延文四年四月四日寂、年八十八。

第二 日善聖人

大法阿闍梨と號す。安中山大法寺を開き、後、身延山四世となる。正慶元年九月二十二日寂。

第三 日傳聖人

實治元年生る。越後の人、文永十一年、朗師に就く。平賀二世となる。創建の精舎、下總香取郡に、岩部山安興寺あり。著作に「別頭三五記」「十二因縁圖解」あり。曆應四年三月六日寂。

第四 日範聖人

豆州船田に、本教寺を、丹波に、福智山常照寺を開きこれに居る。

第五 日印聖人

越後三條に、長久山本成寺を開く。後人、呼んで本成寺派と云ふ、今の法華宗これなり。嘉暦三年寂。

第六 日澄聖人

始め大乘坊、弘長二年、郎師に就く。尾州津島に妙光山本遠寺を創む。

第七 朗慶聖人

鎌倉猿島に法性寺を開く。武藏に八幡山法蓮寺



を創む。

第八 日像菩薩

文永六年生る。下總の人、竹内忠治の子也。始め萬壽磨、後、經一磨。建治元年、郎師に就く、年七歳。元亨元年十一月八日、京都に、龍華院妙顯寺を創む。興國四年(又、康永元年とも)十一月十三日寂。年七十四。別項(鳳翔場)参照。

第九 日行聖人

小田原淨永寺(驛より約五丁、西後山、俚稱入谷津妙光院淨永寺)を創む。

○ 中老僧

第一 日家聖人

正嘉二年生る。上總の人、佐久間重吉の子、重

貞の弟にして、且つ日保の叔父也。始め竹壽磨、文永二年、祖師に就く、年八歳。後、房州小湊に誕生寺を建つ。正和四年七月十日寂。年五十八。

第二 日源聖人

始め智海、後、播磨法印と稱す。駿州岩本實相寺を改宗して、開祖と稱せらる。又、武州雜司ヶ谷に法明寺を修す。碑文谷に法華寺を創む。駿州傳法村に正法寺を開く。正和四年九月十三日寂。

第三 日辨聖人

延應元年生る。駿河の人、熱原國重の子にして且つ日忍の兄也。建治三年祖師に就く。上總鷲巢に鷲山寺を、甲州に遠照寺を、常州多賀に顯成寺及び妙法寺を創む。應長元年六月廿六日寂、年七十三。

第四 日法聖人

建長四年生る。越後の人、芝田右近の子也。(又佐野氏とも)文永十一年三月、祖師に就く。弘安年間、同僚と共に、寂光山龍口寺(鎌倉郡、片瀬)を創む。又、弘安年間、駿州岡宮に光長寺を創む。曆應四年正月五日寂。

第六 日位聖人

駿河の人、駿州村松に龍水山海上寺を改宗す。文保二年寂。

第七 日常聖人

承久二年生る。下總の人。始め富木播磨守五郎胤繼と云ひ、出家して、常忍を稱し、常修を號とす。日頂の義父也。文應元年、宅地を改めて、一字を立つ、正中山法華經寺(千葉縣、中山)これ也。境内に公孫樹あり泣銀杏と云ふ。日頂、常忍の怒をかひ、對顔を許されず、屢來り樹下に慟哭せりと傳ふ。正安元年三月廿日寂。年八十。

第八 天目聖人

正嘉元年生る。鎌倉の人、氏は三浦也。晩に常

第五 日傳聖人

肥前阿闍梨と稱す。字は惠長、初め善智、眞言の翹楚也。文永十一年、祖師に抗して、屈を受く。建治中祖師を毒殺せんとして成らず、罪を謝して戒を受く。甲州小室の舊居を改めて、徳榮山妙法寺と題す。別項(解鶴毒)参照。

州小勝に長久山本門寺を造る。鎌倉圓成寺、品川妙岡寺、佐野妙顯寺も此の聖人の開く所なり。圓極實義鈔」を著す。延元二年四月廿六日寂、年八十一。

第九 日得聖人

清藤武者盛遠の曾孫にして、左衛門尉爲盛と稱す。日滿の父也。始め阿佛坊。文永八年妻と共に祖師に歸服す。佐州妙宣寺を創む。弘安二年寂、年九十一。別項(他山石)參照。

第十 日合聖人

筑前阿闍梨と云ふ。房州の人、工藤吉隆の弟也。年十一祖師に就く。妙興寺を創む。永仁元年十月十一日寂す。

第十三 日保聖人

正嘉二年生る。上總の人、佐久間重貞の子にして、且つ日家の甥也。始め長壽庵、文永二年祖師に就く。上總夷隅郡興津廣榮山妙覺寺二世、小湊三世なり。曆應三年四月十二日寂、年八十三。

第十四 日實聖人

但馬阿闍梨と稱す。後、沼津に妙海寺(始め八大龍王萬年守護山妙法蓮華虛空海會寺と云ふ)を創む。正和三年十月廿三日寂。

第十五 日禮聖人

下總曾谷法蓮寺を開く。曾谷氏、次郎左衛門教

第十一 日賢聖人

寛元元年生る。駿河の人。後、武州雜司ヶ谷法明寺(東京府高田町、目白、池袋兩驛より各四、五町餘)二世となる。曆應元年三月十七日寂、年九十六。

第十二 日高聖人

嘉正元年生る。下總の人、太田乘明の子也。文永中祖師に就く。正安二年正中山二世となる。其の草創の精舎、下總香取郡飯高村金原に妙大寺、海上郡鏡子に妙福寺、常州東茨城郡上中妻村加倉井に妙徳寺あり。正和三年四月廿六日寂、年五十八。

第十六 日祐聖人

大輔房と稱す。後、豆州玉澤二世となる。文保二年四月廿二日寂す。

第十七 日忍聖人

駿河の人、熱原國重の子、日辨の弟也。相州相橋(今の愛甲)長福寺を創む。應長元年四月十日寂す。

第十八 日門聖人

一乘阿闍梨常陸公、常州行方郡本國山妙光寺を開く。

事忽卒に出づ、魯魚の誤多からんか  
敢て孟浪杜撰のそしりを受けん：

大正十二年八月十五日印刷  
大正十二年八月十八日發行  
大正十三年十二月五日再版發行



作者  
編輯人兼  
印刷人  
印刷所

山下 敬太郎  
山下 敬太郎  
見 鷄 助  
大信社印刷所

立正大師布教宣傳  
定價一冊 金參拾五錢

發行所 立正大師布教宣傳協會  
橫濱市中村町字池下六百番地

橫濱市藤田町四百五十九番地

事忽幸に出づ、魯魚の誤多からんか  
敢て孟浪杜撰のそしりを受けん

大正十二年八月十五日印刷  
大正十二年八月十八日發行  
大正十二年十二月五日再版發行



立正大師布教宣傳  
定價一册金參拾五錢

作者 山下 敬  
編輯兼發行人 山下 敬  
印刷人 見 鷄 助  
印刷所 大信社印刷所

發行所 立正大師布教宣傳協會  
橫濱市中村町字池下六百三番地

發兌

立正大師布教宣傳協會

山下敬太郎

校訂 藤原牛麿

終